政大日本研究【第十二號】
2015 年 1 月，頁 67~98

關於和語的自他兩用動詞

王　淑琴*

摘要

日文中有某些自他動詞具同一形態如「扉を開く」「扉が開く」。本稿依照先前研究稱此類動詞為「自他兩用動詞」，並以和語的自他兩用動詞作為考察對象。先前的研究依動詞的目的語（主語）或是格等將自他兩用動詞類型化，但並未釐清這些自他兩用動詞的自動詞或是他動詞用法何時會出現。

本稿將自他兩用動詞依照他動詞句的ヲ格名詞（＝自動詞句的ガ格名詞）類型化，探討每個類型的自動詞或是他動詞用法在何種句構中出現。本稿釐清了何種類型的自他兩用動詞在何種句構中會出現自動詞或是他動詞用法，藉此可得知日語的動詞自他兩用的現象是由句構及文脈所造成的。

關鍵詞：自他兩用動詞，他動性，反身動詞句，物理力他動詞句，
動作主他動詞句

* 國立政治大學日本語文學系　副教授

A Study of Ergative Verbs of Yamato Words

Wang Shu-chin*

Abstract

There are verbs used both as transitive verbs and intransitive verbs in Japanese like “tobira wo hiraku(open the door) , “tobira ga hiraku(the door opens)”. These verbs are called “zita ryouyou verbs(ergative verbs), and the aim of this paper is to break these ergative verbs of yamato words down into patterns. These verbs are classified depending on objects (subjects) or cases in previous study, but the conditions of the transitive or intransitive usage are still unclear.

In this paper, these ergative verbs are broken down into patterns by the object of transitive usage (that is the subject of intransitive usage), and the conditions of the transitive or intransitive usages are observed. By the considerations of this paper, the conditions of the transitive or intransitive usage are clarified and we can conclude that the ergative verbs of yamato words are dependent on the constructions or contexts.

Keyword: ergative verbs, transitivity, reflexive construction, physical, force transitive sentence, agent transitive sentence

*Associate Professor , Department of Japanese , National Chengchi University

和語の自他両用動詞について

王　淑琴*

要旨

日本語の中に、例えば、「扉を開く」「扉が開く」のように同じ音形で自動詞としても他動詞としても使われるものがある。本稿は先行研究に従いこのような動詞を「自他両用動詞」と呼び、和語の自他両用動詞を考察した。従来の先行研究は動詞の目的語（主語）や格などで自他両用動詞を類型化しているが、それらの自他両用動詞はどういう場合に自動詞用法、或いは他動詞用法が現れるのかを明らかにしていない。

本稿は自他両用動詞をその他動詞文のヲ格名詞（＝自動詞文のガ格名詞）により類型化し、それぞれのタイプの自動詞用法、他動詞用法がどういうときに現れるかを考察した。本稿の考察から、どのような自他両用動詞がどのような構文においてその自動詞用法、或いは他動詞用法が現れるかが明らかとなり、また、自他両用という現象は構文や文脈によってもたらされた結果であるということが明らかとなった。

キーワード：自他両用動詞、他動性、再帰構文、物理力他動詞文、動作主他動詞文

*　国立政治大学日本語学科　准教授

和語の自他両用動詞について

王　淑琴

１．はじめに

次の例が示すように、日本語の中に同じ音形で自動詞としても他動詞としても使われるものがある。

(1)a.扉を開く／扉が開く

b.血を噴き出す／血が噴き出す

c.渦を巻く／渦が巻く

d.話を運ぶ／話が運ぶ

森田（2000）はそれらの動詞を「自他両用動詞」と呼んでいるが、本稿もその用語に従う。和語の自他両用動詞の先行研究には森田の一連の研究（1987、1994、2000）があり、和語の自他両用動詞に対する包括的な研究と言える。しかし、次節で述べるように、森田は動詞の目的語(主語)や格などで自他両用動詞を類型化しているが、それらの自他両用動詞はどういう場合に自動詞用法、或いは他動詞用法が現れるのかを明らかにしていない。本稿は自他両用動詞をその他動詞文のヲ格名詞（＝自動詞文のガ格名詞）により類型化し、それぞれのタイプの自動詞用法、他動詞用法がどういうときに現れるかを明らかにする。本稿の考察から、どのような自他両用動詞がどのような構文においてその自動詞用法、或いは他動詞用法が現れるかが明らかとなり、また、自他両用という現象は構文や文脈によってもたらされた結果であるということが明らかとなった。以下、まず、２節で先行研究、３節で本稿が使用する用語の定義と本稿の分類を述べる。次に４節で本稿の考察結果、５節で自他両用動詞の比喩的用法を述べる。

２．先行研究

和語の自他両用動詞を論じたものには、森田（1987、1994、2000）、須賀（1993、2000）、小柳（2012）がある。[1]小柳（2012）は有対自動詞の「～がかわる／終わる／間違う」がなぜ「～をかわる／終わる／間違う」の他動詞用法を新たに持つようになったのかを論じたもので、本稿が取り上げる研究対象（無対動詞）ではない。以下、森田と須賀について述べる。

森田の一連の研究は、動詞の目的語（主語）や格などによって自他両用動詞を類型化し、和語の自他両用動詞に対する包括的な研究と言える。森田(1994)は自他両用動詞の意味パターンを以下のように整理している。

①自他両文型が同じ表現的意味のグループ…「つまり」の関係
　子供を授かった／子供が授かった

②同じ表現的意味で、助詞のゆれと見るグループ…「つまり」の関係　　私は世を背いた／私は世に背いた

③他動現象の結果が自動現象と同じと見るグループ…「だから」の関係　　自動車が泥をはねた／泥がはねた

④他動行為の結果として自動現象が生ずると見るグループ…「だから」の関係　　敵が軍勢を繰り出した／敵の軍勢が繰り出した

⑤自他両文型で動作主・現象主が入れ替わるグループ…逆方向の行為や現象　　父親が息子を怒鳴る／息子が怒鳴る

⑥両文型の使い分けが、対他者と自身の行為との差であるグループ…無関係の行為
　家来が馬を控えて待つ／家来が後ろに控えて待つ

⑦自他の動作主が有情者・非情物の差であるグループ…無関係の事柄　　不良少年が悪事を働く／知恵が働く

[1] 漢語の自他両用動詞を論じたものには影山（1996）、小林（2000）、金（2004）、永澤（2007）、楊（2007）、山田・山田（2009）があるが、本稿の対象は和語なのでここでは和語の自他両用動詞の先行研究のみ取り上げる。

⑧自他で語彙的意味が異なるグループ…無関係の事柄

値段を負ける／敵に負ける

３節で述べるように、本稿が扱うのは上記の類型のうち自他対応の定義を満たした③④のみである。森田は上記の各種類の自他両用動詞の例を挙げているが、動詞と構文の関係、つまり、どのような自他両用動詞がどのような構文において自動詞用法、或いは他動詞用法が現れるかを指摘していない。

須賀（1993、2000）は森田（1994）が指摘した自他両用動詞の一部を考察し、その意味の違いを指摘している。例えば、須賀（1993）では自他同形動詞「増す、巻く、はねる、運ぶ、開く、閉じる、張る、伴う、催す、はだける、触れる」の自他用法を考察し、「自他同形の動詞が成立するのは、他動詞文の主体の動きと客体の動き、すなわち自動詞文の主体の動きとが、別の動きではなく、同一の動きの中に捉えられる場合に限られている」（須賀 1993：335）と結論付けている。例えば、(2)では「列車」が「速度」の変化を引き起こせば、「列車」自身の変化になり、「列車」が「速度」に関して引き起こすその動きそのものが、「速度」の変化であると説明している。

(2)列車はしだいに速度を<u>増し</u>、その心地よい振動が眠りをさそった。（須賀 1993：323）

しかし、例えば「開く」は自他両用動詞であるが、その他動詞用法(3a)では、客体「扉」の変化が主体「男」の変化にはならず、(2)と違って主体と客体の動きが同一であるとは言えない。

(3)a.男は<u>扉を開いた</u>。

b.突然<u>扉が開いた</u>。

実際、自他両用動詞はまったく同じ条件で自他両用になるのではない。例えば、(4a)の「開く」は他動詞用法が一般的であるのに対し、(4b)の「巻く」は自動詞用法が一般的であるという違いがあるように思われる。さらに、(4c)の「噴き出す」は再帰構文で使われ、自動詞用法が他動詞用法から派生されたと考えられる。

(4) a.彼はドアを開いた／ドアが開いた

b.煙が渦を巻いた／渦が巻いた

c.彼は血を噴き出した／血が噴き出した

このように、動詞によって他動詞用法、或いは自動詞用法が現れる条件が異なることが分かる。本稿は自他両用動詞をその現れる構文の違いによって類型化する。それにより、自他両用動詞の他動詞用法、或いは自動詞用法の現れる条件が明らかとなる。

３．定義と本稿の分類

以下、３－１節で「自他対応」を定義することにより本稿の研究対象を定める。３－２節で本稿の分類を述べる。

３－１自他対応とは

本稿は自他両用動詞の自動詞用法と他動詞用法の現れる条件を明らかにするが、何をもって自他動詞が対応していると判断するかをまず明確にする必要がある。佐藤（2005）は自他対応に関する先行研究（奥津 1967、須賀 1986、早津 1989 など）の基本的枠組みに従い、動詞の自他対応は意味、形態、統語の三つの条件をすべて満たさなければならないとしている。例えば、(B) の「折れる」と「折る」は（A）の条件をすべて満たしたものである。

（A）自他対応の定義

a.意味的条件:自動詞文と他動詞文が同一の事態の側面を叙述していると解釈可能である。

b.形態的条件：自動詞と他動詞が同一の語根を共有している。

c.統語的条件:自動詞文のガ格と他動詞文のヲ格が同一の名詞句で対応している。

（B）a.　　鉛筆が　折れる。

b.太郎が　鉛筆を　折る。　　（佐藤 2000: 170）

本稿はこの自他対応の定義を前提に自他両用動詞を定義する。すなわち、(b)の条件を(b’)「自動詞と他動詞が同一の音形を共有し

ている」にし、自他両用動詞は(a)（b’)(c)の条件を満たさなければならないと定義するのである。この定義に従うと、以下のものは自他が対応しているとは言えない。(5a)で「弾む」は自他動詞の用法を併せ持っているが、自動詞文のガ格名詞と他動詞文のヲ格名詞が同一の名詞を取ることがなく、(c)の条件を欠いている。また、同一の名詞を取ることがないため、当然同一の事態を叙述することができなく(a)の条件も欠いている。[2](5b)で「体を保つ」という他動詞用法は「若々しい体を保つ」「体を柔軟に保つ」のように「体をある状態に保つ」の意味を表すが、自動詞用法「体が保つ」は「ファーストクラスじゃないと体が保たない」のようにもっぱら否定形で「体が持たない」の意味で使われる。つまり、「体が保つ」という用法はイディオム化してしまったので、他動詞用法に完全に対応しておらず(a)の条件を欠いている。(5c)で「舌を巻く」は「感心する」という比喩的な意味で使われ、その意味に対応する自動詞表現が成立しない。したがって、「感心する」の意味を表す「舌を巻く」は(a)(c)の条件を欠いている（比喩的用法については5節参照)。

(5)a.ボールが弾む／*ボールを弾む（cf.チップを弾む)

b.体を保つ／?体が保つ（cf.体が保たない)

c.彼らの能力に舌を巻く／*彼らの能力に舌が巻く

このように、本稿は自他両用動詞を(a)自動詞文と他動詞文が同一の事態の側面を叙述していると解釈可能である、(b’)自動詞と他動詞が同一の音形を共有している、(c)自動詞文のガ格と他動詞文のヲ格が同一の名詞句で対応している、という三つの条件を満たしたものと定義し、その定義を満たしたものを考察対象とする。

[2] (5a)のような動詞について、森田（2000）は「自他同形動詞」と名付けて「自他両用動詞」と区別している。森田は「同じ語形が意味面で自他間に共通性を持ち、文法面でも格に立つ名詞語彙に異動がない場合を指す」(森田 2000: 63）ものを「自他両用動詞」と定義し、「負う」（「責任を～」「先人の努力に～」）のような同じ語形を取って別々に機能しているものを「自他同形動詞」と定義している。

３－２自他両用動詞の類型

まず森田などの先行研究から自他両用動詞を収集し、それらの動詞を含む用例を BCCWJ（「現代日本語書き言葉均衡コーパス」）から抽出する。次に上記の自他両用の定義を満たしたものを抽出し分類を行う。BCCWJ の用例に依拠するので、先行研究で挙げられたが用例が見つからなかったものは除外されることになる。例えば、「催す」「繰り出す」「去る」[3]などの例は BCCWJ でもっぱら自動詞或いは他動詞として使われ、これらの動詞は自他両用の用法がない、或いは少ないものと言えるので除外することにする。本稿は、コーパスの用例に基づいて記述するので実際の使用実態が反映される。それにより自他両用動詞の用法をより厳密に記述することができる。

自他両用動詞の場合、他動詞のヲ格名詞が自動詞のガ格名詞と同じであるが、本稿はその名詞の種類によって自他両用動詞を類型化する。その名詞の種類は構文のタイプを反映しているので、これらの種類は構文的にも異なるということになる。他動詞文のヲ格名詞（＝自動詞文のガ格名詞）の種類により自他両用動詞を次の四つのタイプに分類できる。動詞によって複数の種類の名詞を取るものがあるが（例えば「窓（が／を）開く」「花（が／を）開く」）、この場合は多義性を持つ動詞として扱う。

（A）類は他動詞文のヲ格名詞（＝自動詞文のガ格名詞）に【人工物】が来るものである。そのような動詞は少なく「開く」と「閉じる」のみある。４－１節で述べるように、自動詞文の主語に人工物を表す名詞が来る（例えば、「ファイルが閉じた」）のは一般的ではなく文脈的な条件が必要である。

[3] 森田（1994: 240）は「眠気を催す」「眠気が催す」の例を挙げているが、後者の用法は BCCWJ にはなく、また、ウェブページでも少ない。また、森田（2000: 69）では①類の自他両用グループとして「繰り出す」を挙げているが、「繰り出す」は「軍勢を繰り出す」「人が繰り出す」のように自他同形動詞であり自他両用動詞ではない。森田（1994: 239）では「迷いを去る」「迷いが去る」の例を挙げているが、「迷いを去る」は BCCWJ にはなく、ウェブページでも少ない。

(A)【人工物】

a.開く：ドア／窓／扉／門／水門／城門／穴／幕／蓋／カーテン／ウィンドウ／画面／ファイル／パネル／ダイアログ／フォルダ

b.閉じる：ドア／戸／門／窓／ゲート／幕／回路／ウィンドー／画面／シャッター／カバー／カーテン／ファイル／ページ

(B)類は、【身体部位】が来るもので、つまり、他動詞用法が再帰構文というものである。ここでは身体部位に「気、欲」などの抽象的なものも含まれる。

(B)【身体部分】

a.開く：口／目／心／唇

b.閉じる：口／目／心／声門

c.巻く：舌／尾

d.噴き出す：血／汗／泡

e.張る：腹／欲／気／肩／胸[4]

f.はだける：胸

g.馳せる：思い

h.触れる：手／唇（三項動詞）

i.つく：手（三項動詞）

(C)類は「花、風」などの【自然物】が来るものである。４－３節で述べるように自動詞文の場合は構文全体が自然現象を表し、他動詞文の場合は「物理力他動詞文」か「動作主他動詞文」になる。また、意味と構文が再帰動詞と同じものもある。

(C)【自然物】

[4] 「胸を張る」は多くの場合「自信に満ちた態度をとる」という比喩的な意味で使われるが、（ｉ）が示すように「胸を大きく膨らませる」の意味で使われるものもある。その意味においては自他の対応が見られる。
（ｉ）藤吉郎は両手をひろげて胸を張り、深呼吸をし、（後略）
（ⅱ）私は生理前には胸が張るのですが、胸が張ったまま一向に生理がこないので。

a.開く：花／花びら／蕾／葉

b.閉じる：花

c.巻く：風／渦

d.吹（噴）き出す：水／蒸気／煙（黒煙など）／炎／風

e.吹（噴）き上げる：水／煙

f.吹きつける：風

g.吹き込む：風（熱風／新風[5]）

h.はねる：水

i.結ぶ：実

j.張る：根／水

k.張り出す：枝

(D)類は【抽象名詞】が来るものであり、働きかけ性がないものである。意味と構文が再帰構文に類似したものと、意味が比喩的なものがある。

(D)【抽象名詞】

a.伴う：危険／困難／行動／責任／リスク／結果など多数

b.増す：不安／厳しさ／寒さ／親しみ／食欲など多数

c.盛り返す：勢い／人気

d.運ぶ：事／話／仕事

e.閉じる：歴史

f.開く：距離／市場

以下、それぞれの種類と対応する構文について述べる。以下の用例について、出典が明記されないものはBCCWJから収集したものである。

４．考察

４－１(A)類：【人工物】を表す名詞が来るもの

5 「新風（を／が）吹き込む」は「新しい風（を／が）吹き込む」の意味を表すので、ここでは「新風（を／が）吹き込む」を「風（を／が）吹き込む」の比喩的用法として扱う。

例えば、「ドアが開（ひら）く／閉まる」[6]という状態はドアの自らの力で達成することが不可能なので、他動詞のヲ格名詞（＝自動詞のガ格名詞）が【人工物】を表す場合、「開く／閉じる」は他動詞用法が基本であると考えられる。一方、次の例が示すように、人工物が主語に来る「開く」「閉じる」の自動詞用法が多く現れる。

(6) ヒロくんの部屋は相変わらずドアが閉じたままだったが、構わず入って行く。

(7) 弥は、つぶやきました。後ろで、するりとふすまがひらきます。

王（2014)は「開く」「閉じる」はもともと他動詞として使われるものであるが、ある種の他動性が低い文脈で自動詞としても使われると主張し、その文脈的条件を提示している。ここでは、自動詞文のガ格名詞が人工物を表す場合に関わる条件を以下に示す。つまり、「開く」「閉じる」の自動詞文の主語に人工物を表す名詞が来る場合、以下のいずれの条件を満たさなければならない。

①「テイル」形で使われ、状態の意味を表す場合

②「自然に～という状態になる」という文脈的意味がある場合

③連体修飾節内にあり背景化された出来事で使われる場合

④動作主が不明、或いは動作主の意志を避ける場合

①の条件について、次の例が示すように「開いている」は城門の状態を表しており、動作の意味がない。

(8) 屋根瓦が赤く、四角く高い塔の下で、アーチ形の城門がひらいている。

杉本（1995）は変化動詞文において動作主が存在しない場合、結果相解釈が許されると指摘している。(9)の文は非文であるが、(10)が示すように(9)の文を「テイル」形にすると自然になる。

[6] 「開く」の場合、「開（あ）く」と「開（ひら）く」が同じ表記になるので、本稿はコーパス検索アプリケーション「中納言」を使い、「語彙素読み」検索で「ヒラク」と指定し用例を抽出した。

(9)*カバンが枝にぶらさがった。　　（杉本 1995: 48）

(10)カバンが枝にぶらさがっている。　　（ibid.）

この現象について、杉本は「テイル」形が結果相解釈を受けるために脱動作主化され、「カバン」のような無生物主語を許すようになるのではないかと指摘している。つまり、「テイル」形で動作性がなくなり、無生物主語を取る自動詞用法が可能になるのである。上記の例も同様に、「テイル」形は状態を表すため、その動作主性が薄く、無生物主語を取る自動詞用法が可能になると考えられる。

②の条件について、「自然に～という状態になる」という文脈的意味がある場合、「開く」「閉じる」の自動詞用法が可能になる。そのような文脈は、条件節（～と、～ば）や手段、原因を表す節に導かれ、「その状況のもとで／その手段によって／それが原因で、ある結果状態が生じる」という意味を表す（(11)～(13)参照）。

(11)ＰａｌｍＤｅｓｋｔｏｐを起動すると、予定やアドレスなどの機能を持ったウィンドウが開きます。[7]

(12)パソコンの便利な使い方が載っているサイトとかありますか？Ａｌｔ＋Ｆ４で画面が閉じるとか。

(13)間違えてダブルクリックしたためにふたつウィンドウが開いてしまう、というミスを避けられる。

③の条件について、次の例が示すように、「開く」「閉じる」の自動詞用法が連体修飾節内に現れる。例えば、(14)でレンズカバーが閉まる状態になるには、レンズカバー自らの力で実現できなく必ずカバーを閉じる動作主が必要である。しかし、ここでは、焦点が後文「撮影画像がすぐに確認できる」にあり、連体修飾節内の「レン

[7] 条件表現が使われず文脈から条件の意味が付与される場合もある。次の例では、[情報を見る]をクリックすれば［情報]ウィンドウが開くという意味を表すので、条件表現が使われていないが前後の文脈により条件の意味が付与される。

（ｉ）その場合には、ファイルを選択して、［ファイル］メニューの［情報を見る］をクリックします。［情報］ウィンドウが開いたら［このアプリケーションで開く］で「Ｉｌｌｕｓｔｒａｔｏｒ　ＣＳ２」を選択します。

ズカバーを閉じる」という動作が背景化されたと考えられる。そのため、わざわざ人為的な意志を前面に出し、他動詞表現を含む「レンズカバーが閉じられた」を使う必要がなく、自動詞用法を使うのである。他の例についても同じようなことが言える。[8]

(14)撮影モード中やレンズカバーが閉じた状態でも、撮影画像がすぐに確認できる。

(15)空港ゲートが開くのを待っている大量のコンボイが行列を作っていた。

(16)ヒロくんの部屋は相変わらずドアが閉じたままだったが、構わず入って行く。「ヒロ兄ちゃん、おやつ食べないの？」、子どもたちが口々に声をかけるが、(略)。

④の条件について、(17)でガラス扉が開いている状態になるのは、動作主による働きかけの結果という可能性もあるが、自然にガラス扉が開いたという可能性もある。ここでは動作主が不明であるため、自動詞用法が使われる。また、(18)で電車の扉を閉じるのは電車の運転手と考えられるが、ここではわざわざその動作主の存在を明示する必要がないため、他動詞の受身形（「閉じられる」）ではなく自動詞が使われる。

(17)彼が羊のローストにナイフを入れようとしたとき、ダイニング・ルームのガラス扉がひらいて、聖職者用のカラーをつけた男が姿を見せ、(略)。

(18)彼に連れ添う女が、彼の視線をなぞって私を発見するよりも早く、私は踵を返して渋谷行きの車両に乗り込んだ。扉が閉じ、電車が発車する。

王（2014）は上記の条件を Hopper and Thompson（1980）が提示した他動性の十個の構成要素で分析し、「参加者」「動作性」「アスペ

[8] この現象について、高橋（1994)は動詞が連体修飾語になる場合、ヴォイスから解放されやすいと指摘している。例えば、(ｉ)で誰が置いたかは問題ではなく、「おいた」と「おかれた」の対立が解消されると述べている。
(ｉ)窓よりに置いたテーブルにむかって　（高橋 1994: 14)

クト」「瞬間性」「意図性」「動作主性」「対象への影響」の特徴で他動性が低く、他動性の低い文脈であると指摘している。このように、自他両用動詞「開く」「閉じる」は他動詞文のヲ格名詞（＝自動詞文のガ格名詞）が人工物を表す場合、他動詞用法が基本であるが、ある種の他動性が低い文脈では自動詞としても使われることが分かる。

４－２(B)類：【身体部位】を表す名詞が来るもの

(B)類の自他両用動詞は他動詞文のヲ格名詞が身体部位を表し、その他動詞用法はいわゆる再帰用法である。仁田は「再帰」とは「動作主から出た働きかけが結局は動作主自身に戻って来ることによって、動作が完結する」現象と定義し（1982: 80)、再帰動詞と再帰用法の動詞を区別している。前者は再帰的用法しか持たない動詞で、衣服等の着脱を表す動詞が代表的である（(19)）。後者は普通の他動詞でありながら、その一用法として再帰的な用法を有するような動詞であり、再帰構文のヲ格名詞は「身体部位」(「気持ち、心」といった心理的なものも含まれる）という意味特徴を帯びたものであると述べている（(20)）。

(19)そこにはベレー帽をかぶった猫が立っていた。

（仁田 1980: 79）

(20)a.太郎が次郎を叩いている。 (ibid: 86)

b.子供は手を叩いて喜んだ。 (ibid: 87)

次の例が示すように(B)類の動詞の他動詞用法は再帰用法である。

(21) a.王子は気を失って手足をぐったりさせ、目を固く閉じていた。

b.やがて闇崎は、鼻と口から血を噴き出し、のたうち回って床に倒れた。

c.「私が彼の両親の世話に二十四時間気を張る状態だったのに、彼は休日になると、外に遊びにいってばっかり。

d.「ごめんなさいっ、ごめんなさい」岩村真理子は卓袱台に

手をつき、繰り返し頭を下げた。

e.教科書やテレビ時代劇の登場人物も、その石垣に手を触れたことがあるかも知れない。

再帰構文の特徴について、仁田（1982）はまともの受動を形成しないので＜他者への働きかけ＞といった意味的特徴をもたず、典型的な他動詞からはずれ自動詞に近づいていると述べている。高橋（1985）やヤコブセン（1995）も同じ主張である。

（22）a. 太郎は紺の背広を着ていた。

b.*紺の背広は太郎に着られていた。　　（仁田 1982: 83）

次の例が示すように、自他両用動詞も同様に再帰構文で使われる場合は＜他者への働きかけ＞がなく、まともの受動文にならず自動詞に近づいている。

（23）a.彼はそっと目を閉じた。

→*目は彼にそっと閉じられた。

b.男は顎の下から血を噴き出した。

→*男に顎の下から血が噴き出された。

c.登場人物が石垣に手を触れた。

→*手は登場人物によって石垣に触れられた。

しかし、再帰構文は意味が自動詞に近づいているが、他動詞用法と自動詞用法は完全に同じ場合に使われるのではなく、動作主の意志があるか否か、また、描写の視点により自他動詞用法が使い分けられる。例えば、(24a)で「目を閉じる」という動作は動作主「ぼく」が意図的に行った動作であるが、(24b)で「顔の前で手を左右にちょっと動かす」という条件の下で目が自然に閉じるという意味を表すため、自動詞用法が使われる。(25a)で描写の視点は人物にあるため他動詞用法が使われるが、(25b)で相撲取りの細かい動作に焦点が当てられているため、「手」を主語にする自動詞用法が使われる。

（24）a.ぼくは、目を固く閉じ、歯を食いしばって、体を硬くしていた。

b.「こちらを向いて、ハイッ目をつぶって」と言って、その人の顔の前で手を左右にちょっと動かすだけで目が閉じて催眠状態に入ります。

(25) a.藤木は、ふらつく足で立ち上がった。すぐにバランスを崩して地面に手をついたとき、指先が何かに触れた。

b.この相撲は横綱の外掛けで重ねもちになりかけたが、関脇は背中が土俵につきそうな状態から肩越しに横綱を投げようとした。両者重なって倒れたが、上になった横綱の手が先に着いたとして軍配は関脇に上がったが、(略)。

以上の説明をまとめると、(B)類の動詞はその他動詞用法が再帰構文という非典型的な他動詞構文で現れる。それらの動詞の自動詞用法は他動詞用法から派生されたものである。また、他動詞用法を使うか自動詞用法を使うかは、動作主の意志と描写の視点による。

４－３(C)類：【自然物】を表す名詞が来るもの

(C)類の自他両用動詞は、その自動詞用法が自然現象を表す。それらの動詞はさらに自動詞用法が基本の動詞(C-1)と、他動詞用法が基本の動詞(C-2)に分けられる。

(C-1)巻く、噴き出す、吹き上げる、吹きつける、吹きこむ、はねる

(C-2)開く、閉じる、結ぶ、張る、張り出す

４－３－１自動詞用法が基本の動詞(C-1)

(C-1)の自他両用動詞は、次の例が示すようにその自動詞用法が自然現象を表す。また、自他両用が見られるのは「風、水、煙」など限られた名詞が来る場合である。

(26) a. 強い風が巻きはじめた。

b. (略)、枯れた井戸の底にじわっと水が噴きだした。

c. 市内のいたる所で、砂を含んだ水が吹上げ、場所によっては五メートルにも達したと伝えられています。

d. ぬれた衣服の上から真冬の風が吹きつけて、骨まで凍り

つきそうだった。

e. 外から熱風が吹きこんでくるにもかかわらず寒い。

f. 建物の前には、不思議なしかけのある噴水があり、水がはねています。

(C-1) の他動詞用法について、非意図的な動作を表す「物理力他動詞文」と、意図的な動作を表す「動作主他動詞文」がある。どちらの他動詞文になるかは、個々の動詞が表す意味と文脈による。まず、「物理力他動詞文」を見る。(27)(28)では「火」「迫水機」は無生物主語であり、文全体が非意図的な動作を表す。

(27)火は風を巻いて城兵たちを情け容赦なく焙り立てる。

(28)迫水機は黒煙を噴き出しながらも、少しも変わらぬ速力と凄まじさで赤い死に亀を追跡していた。

井上（1995: 111-112）は意図的動作を表さない他動詞文に、無意志主語他動詞文（有生主語を持ちながら非意図的動作を表すもの、例(29)）、物理力他動詞文（自然現象など物理的な力を表す名詞句を主語とするもの、例(30)）、原因他動詞文（原因の名詞句を主語とするもの、例(31)）、道具他動詞文（道具を表す名詞句を主語とするもの、例(32)）があると指摘している。

(29)明は運転免許証をなくした。

(30)津波が海浜の部落を襲った。

(31)過度の野心が彼の寿命を縮めた。

(32)白い布が机を覆っていた。　　井上（1995: 112）

(C-1) の他動詞用法は、上記の(27)(28)のように井上が指摘した「物理力他動詞文」である。一方、次のような主語が事態を引き起こす動作主を表す「動作主他動詞文」もある。(34)で主語「吉次」は「煙を吹き上げた」という事態を引き起こす動作主である。

(33)「ふうん」吉次は、煙草の煙を吹き上げた。

井上（1994）は「動作主他動詞文」は典型的な他動詞文で、「意図的動作」と「被動者の変化」という意味特徴を持っているが、「物理

力他動詞文」は「意図的動作」という特徴を欠いていると述べている。主語の意志性は他動性を定義する基本的な特徴なので（井上1994）[9]、その特徴を欠いた「物理力他動詞文」は他動性が低い非典型的な他動詞文と言える。「物理力他動詞文」のような無生物主語の使役構文について、西村（1998: 137-140）は自らの力ないしエネルギーを用いて活動し、そのような活動が他の存在に影響を与えうる主体という捉え方であろうから、自然現象のこの把握の仕方は「擬人化（personification)」の一種であると指摘している。このように、「物理力他動詞文」は意味上、「意図的動作」という重要な特徴を欠き、他動性が低い非典型的な他動詞文である。また、「動作主他動詞文」との関係について、擬人化の働きによって「動作主他動詞文」から拡張された構文と言える。

(C-1)の他動詞用法は「物理力他動詞文」になるか「動作主他動詞文」になるかは、個々の動詞が表す意味と文脈による。例えば、「(風／渦　を）巻く」「(水／煙　を）吹（噴）き出す」は「物理力他動詞文」で多く現れるが、「(水を）はねる」は「動作主他動詞文」で多く現れる（次の例を参照)。

(34)マクリンのジャケットのほつれた袖に火がつき、煙が穴の壁にそって渦を巻いた。

(35)広場の中央には円形の池があり、噴水が水を噴き上げている。

(36)下の娘が水をはねて遊ぶ。

また、「(風を）吹きつける」はコーパスで次の１例のみで「物理力他動詞文」であるが、ウェブページでは(38)のような「動作主他動詞文」もある。

(37)まず、太陽があの美しい金色の顔を大地にあらわし、あるい

[9] 斎藤（2003: 45）では、他動性の原型を定義するための意味素性としてどんなものを設定すべきかについて、井上（1995）を含む多くの研究者は主語の意志性を他動性の原型を定義する基本的な要素としているが、角田（1991）は被動作性こそが他動性の原型を定義する上で最も基本的な意味素性であり、意志性の方は無関係という考え方であると指摘している。

は、厳しい冬の跡に新しい春が心地よい初春の西風を吹きつけるや、(後略)。

(38)タンクには何も入れずに空のまま、送風だけの機能を利用し、露払いをします。(中略)強い風を吹きつけることで水分を飛ばすとともに、苗をサワサワと風でなでてやり、(後略)。

(http://www.sizensaibai.jp/2009/05/)

このように、(C-1)の動詞の他動詞用法が「物理力他動詞文」になるか「動作主他動詞文」になるかは、個々の動詞が表す意味と文脈によることが分かる。

以上の説明をまとめると、(C-1) の動詞は自他両用動詞として使われる場合、自動詞文は自然現象を表すが、他動詞文は「物理的他動詞文」か「動作主他動詞文」になる。「動作主他動詞文」は「意図的動作」と「被動者の変化」という意味特徴を持っており、典型的な他動詞文であるのに対し、「物理力他動詞文」は「意図的動作」という特徴を欠いており、非典型的な他動詞文である。「物理力他動詞文」は構文上他動詞文と同じ構造を持っているが、意味上自動詞文と同様に自然現象を表す。(C-1) の動詞は自動詞用法が自然現象を表し、他動詞用法も多くは自然現象を表すため、もともと自動詞の概念を表す動詞である。その意味で、自動詞用法が基本であると言える。[10]

４－３－２他動詞用法が基本の動詞(C-2)

この節では (C-2)の動詞を見る。その他動詞用法は次の例が示すように、ヲ格名詞が主語名詞の一部を表し一種の再帰構文と言える。また、それらの動詞の中に「実を結ぶ」「根を張る」のような、ヲ格名詞と動詞が語彙的コロケーションを形成しているものがある。例

[10] 査読者の一人から(C-1)の動詞が自動詞用法が基本という判定基準は他のタイプのと違うという指摘を受けた。(C-1)と(C-2)の動詞は使われる構文が違うので、本稿は異なるタイプのものとして扱う。構文からは(C-1)の動詞はどちらが基本かを判定するのが難しいので、動詞の表す意味自体で判定した。判定基準の統一を今後の課題としたい。

えば、(39)でヲ格名詞「実」はその主語名詞「花」の一部を表し、再帰構文と言える。また、「実を結ぶ」は意味がイディオム化し「実る」という意味を表す。

(39)池に咲く蓮の花のように、七～九月ごろ水面に白い花が咲き、やがて薄紅色の実を結びます。

(40)なかでもブル・ラッシュは水中に根を張って繁殖するので、ときどき叔父がブル・ラッシュを刈り、積み上げて乾燥させる作業に連れていってもらった。

(41)「てめえか！」大仏の頭上に太い枝を張り出している松がある。

(42)掛け軸には、暗緑色の葉が凛として伸びた間に、薄紫と真白い数個の花菖蒲が、大きくてふくよかな花びらを開いて咲き誇っていた。

(43)オトギリ草は陽が高くなると花を閉じてしまうため僕達は朝起きるとまずそれを摘むのが日課となった。

(C-2)の動詞の自動詞構文は「X に Y が V」のように、二格で「Y が V」の事態の帰着点を表したり((44)(45)(46))、また、帰着点が主題化し「X は」で表す場合もある((47))。

(44)穂に実が結び立ち枯れると、秋も深まり寒くなる。

(http://archstudioten.jugem.jp/?day=20060927)

(45)「私が小屋を目指した時の記憶ですが、頭の少し上に太い枝が張り出していたかな。

(46)ぷーっときりをふいて、すーっとアイロンをすべらせると、ちぢれたぬのがたちまちのびて、そこに、まっかな花がひらきます。

(47)地植えは可能と思います。基本的に移動の時は、現在使っている土ごと移動するとよいですね。ミリオンバンブーは根が張って大きくなりますよ。

このように、(C-2)の動詞は一種の再帰構文に現れ、(B)の動詞と

同様に他動詞用法が基本でそこから自動詞用法が派生されたと考えられる。一方、(C-2)の動詞のうち「実を結ぶ」「根を張る」のようなイディオム化し、多くの場合は比喩的に使われるものがある（5節参照)。

４－３節をまとめると、(C)類の自他両用動詞はその自動詞文が自然現象を表すものである。(C)類の動詞はさらに自動詞用法が基本の動詞(C-1)と他動詞用法が基本の動詞(C-2)に分けられる。(C-1)の動詞は自動詞文が自然現象を表すが、他動詞文が「物理的他動詞文」か「動作主他動詞文」になる。「物理的他動詞文」は「動作主他動詞文」と同じ構造を持っているが、構文の意味は自動詞文と同じである。(C-1)の自他両用動詞はもともと自動詞の概念を持つ動詞という意味で、自動詞用法が基本であると言える。これに対し、(C-2)の動詞はその他動詞文が一種の再帰構文であるため、他動詞用法が基本でそこから自動詞用法が派生されたと考えられる。

４－４(D)類：【抽象名詞】が来るもの

(D)類の自他両用動詞は、その動詞の意味と構文の違いによってさらに次の二種類に分けられる。

(D-1)伴う、増す、盛り返す

(D-2)運ぶ、開く、閉じる

(D-1)の動詞「伴う」「増す」「盛り返す」はその他動詞文が再帰構文と同じ構造を持つ。これに対し、(D-2)の動詞「運ぶ」「開く」「閉じる」は動詞自体が多義的であり、自他両用の場合は意味が比喩的になる。

「伴う」「増す」「盛り返す」は他動詞用法「X が Y を V」ではヲ格名詞 Y が主語名詞 X の一つの特徴や側面を表す。(48)の「救出は危険を伴う」は「救出は危険だ」と同じ意味を表し、「危険」は救出することの一つの特徴である。(49)の「経済環境が厳しさを増す」はもともと厳しい経済環境がこれからさらに厳しくなるという意味を

表し、ヲ格名詞「厳しさ（を伴うこと）」は主語名詞「経済環境」の一つの特徴と言える。(50)のヲ格名詞「勢い」は主語名詞「市場志向型」の勢いであり、「市場志向型」の一つの側面である。

(48)「承知しています。軍師、ご安心ください」「救出は危険をともないます。

(49)今後経済環境が厳しさを増すにつれ、ますますこの傾向は強まること必定である。

(50)（略）、八十年代以降、世界的には市場原理重視と個人主義的労働契約の拡大など「市場志向型」が再度勢いを盛り返したようにもみえる。

これらの他動詞構文は、ヲ格名詞が主語名詞の一つの特徴や側面を表し、対象への働きかけがないという点においては再帰構文と類似性が見られる。ここでは「伴う」「増す」「盛り返す」のこのような他動詞文を「擬似再帰構文」と呼ぶ。[11]

(C-2)の動詞と同じように、他動詞構文「X が Y を V」ではヲ格名詞 Y が主語名詞 X の一部を表すため、X は「Y を V」という事態が起きる場所とも解釈できる。例えば、上記の(48)で「危険を伴う」のは「救出する」という出来事が発生した際であり、この意味で「救出」は「危険」が起きる場所とも解釈できる。したがって、(C-2)の動詞と同じように、自動詞構文の場合は「X に Y が V」のように、二格で「Y が V」の事態の帰着点を表したり((51)(52))、また、帰着点が主題化して「X は」で表す場合もある（(53)(54)）。

(51)神経叢に癌がくっついているため、手術には大きな危険が伴うのだそうだ。

[11] 「増す」の場合、少ないながら（ｉ）のような無生物主語の他動詞文がある。（ｉ）（ⅱ）が示すように「食欲を増す」「食欲が増す」両方が成立し自他両用であるが、（ｉ）のヲ格名詞「食欲」は主語名詞「香り」の一特徴や一側面ではない。これは「増す」の意味と関連するのか、それとも無生物主語の他動詞文と関連するのかは今のところ解明できず、今後の課題としたい。

（ｉ）ピリッと効いた香辛料と刺激的な香りが食欲を増します。

（ⅱ）【体重管理】気候がよくなって食欲が増してくるため、食べすぎる傾向があります。

(52)財政再建に厳しさが増すなかで、特別会計の徹底した見直しを求める。

(53)一般のマンションに比べて、上層部の外壁補修は危険が伴う作業になるし、エレベーターの交換など費用のかかる補修も多い。

(54)(略)、デパートの事業展開は厳しさが増すものと予想される。

次に、(D-2)の動詞を見る。それらの動詞は動詞自体が多義的であり、自他両用の場合、意味が比喩的になる。例えば、「運ぶ」は「物や人をある場所から他の場所へ移す」[12]という具体的な動作を表す意味があるため、抽象的な目的語「事／話／仕事」を取ると直接表現する「事／話／仕事　を進める」と比べて意味が比喩的になる。「距離／市場　を開く」「歴史を閉じる」も同様に、「閉じる」「開く」に具体的な動作を表す意味があるため、それらの表現は意味が比喩的になる。このように、「運ぶ」「開く」「閉じる」は具体的な動作を表す意味があるため、抽象的なヲ格名詞を取ると他動詞文全体が比喩的な表現になる。それらの動詞の他動詞用法は「動作主他動詞文」である。(55)で主語名詞「彼」は話を進める動作主であり、(56)で動作主が示されていないが、前後の文脈から見ると「国」であることが分かる。(57)で主語は無生物主語であるが、ここでは一種の擬人化と見なすことができる。

(55)殿の御父上は熱心な信徒と承るが」と彼は巧妙に話を運んだ。

(56)アジアの関係をよい方向へ発展させることを望むなら、「市場を果敢に開く」以外に手がないのはあきらかなのだ。

(57)千九百九十一年十二月を似て、ソビエト社会主義共和国連邦は七十五年の歴史を閉じ、事実上、二十世紀は終わったといえるだろう。

(D-2)の動詞の自動詞用法は、4－1で見た文脈的条件を満たした

[12] デジタル大辞泉。

場合に現れる。(58)で「事を運ぶ」のは話し手であるが、ここでは物事の結果があたかも自分の意志と関係がないように捉えられるため、自動詞表現が使われる。４－１で見た「④動作主が不明、或いは動作主の意志を避ける場合」という条件を満たしている。(59)で株式市場を開くには当然動作主が必要であるが、文の焦点が述語の「売買できる」ことにあるため、ここではわざわざ動作主が含意される受身形(「市場が開かれている」)ではなく、自動詞が使われる。４－１で見た「③連体修飾節内にあり背景化された出来事で使われる場合」という条件を満たしている。(60)で波線の部分が原因を表し、それが原因で川崎漁師百年の歴史が終わったという意味を表す。「②自然に～という状態になる」という文脈的条件を満たしている。

(58)不発というより、実行はしてみたが計画通りに事が運ばず、途中で断念したのだが。

(59)また、株式市場は「ザラバ取引」と呼ばれる、市場が開いている時間は常時売買ができるような取引制度となっています。

(60)だんだん漁場が埋め立てられ最後は東扇島の埋め立て地ができて 、川崎漁師百年の歴史が閉じてしまったんです。

このように、(D-2)の自他両用動詞「運ぶ」「開く」「閉じる」は具体的な動作を表す意味があるため、抽象的なヲ格名詞を取ると他動詞文全体が比喩的な表現になる。その自動詞用法は４－１で見た文脈的条件を満たした場合に現れることが分かる。

４－５まとめ

４節の考察結果を以下のようにまとめられる。

表 1

	ヲ(ガ)格名詞	他動詞文	自動詞文	例
A類	【人工物】	動作主他動詞文（基本）	他動性が低い文脈に現れる	彼がドアを開く ドアが開く
B類	【身体部位】	再帰構文（基本）	自動詞化した再帰構文	彼が血を噴き出す 血が噴き出す
C類	【自然物】(C-1)	物理力／動作主他動詞文	自然現象(基本)	火が風を巻く 風が巻く
	【自然物】(C-2)	再帰構文（基本）	自動詞化した再帰構文	花が実を結ぶ 実が結ぶ
D類	【抽象名詞】(D-1)	擬似再帰構文（基本）	自動詞化した再帰構文	環境が厳しさを増す 厳しさが増す
	【抽象名詞】(D-2)	動作主他動詞文（基本）	他動性が低い文脈に現れる	彼が話を運ぶ 話が運ぶ

(A)と(D-2)は、他動詞用法は「動作主他動詞文」になり、自動詞用法は他動性が低いという文脈的条件が必要であるため、他動詞用法が基本であると考えられる。(B)と(C-2)(D-1)は、他動詞用法は再帰構文やそれに類似する擬似再帰構文に現れるが、自動詞用法は再帰構文が自動詞化したものであり、他動詞用法が基本であると考えられる。(C-1) の動詞は自動詞用法が自然現象を表し、他動詞用法も多くは自然現象を表すため、もともと自動詞の概念を表す動詞である。したがって、(C-1)の動詞は自動詞用法が基本であると考えられる。つまり、日本語の自他両用動詞は、(C-1)の動詞以外はすべて他動詞用法が基本であることが分かる。

前に述べたように、再帰用法は他者への働きかけがないため、典型的な他動詞からはずれ自動詞に近い。擬似再帰構文は意味も構文も再帰構文に類似しており、自動詞に近いと言える。また、４－３

節で見た(C-1)の他動詞用法は「物理力他動詞文」で多く現れるが、「物理力他動詞文」は「意図的動作」という特徴を欠いており、非典型的な他動詞文である。つまり、自他両用動詞の他動詞用法は(A)と(D-2)を除いて非典型的な他動詞文で現れることが分かる。このように、自他同形動詞の他動詞用法はほとんど非典型的で自動詞に近い構文に現れると言える。一方、自動詞用法について、(A)と(D-2)の自動詞用法は文脈的条件に依存する。以上のことを合わせて考えると、自他両用という現象は構文や文脈によってもたらされたものであると考えられる。これは自他両用という現象を構文や文脈のレベルから見ることによってはじめて明らかとなったことである。

次に先行研究との接点を述べる。森田（1994）は(61)のような「自他二様の形式が納まり得る文脈」（同書：238）では、他動詞文が自動詞文に歩み寄っていると指摘している。また、自他二様の形式が納まり得る文脈で「生える／生やす」のような自他異形のペアの動詞」がなかったら、同じ動詞が立ってしまい((62))、これは自他両用動詞を生み出す要因の一つであると述べている。

(61)鯰はヒゲを生やしている／鯰はヒゲが生えている。

（森田 1994：239）

(62)a.この干し柿は粉を吹いている／この干し柿は粉が吹いている。

b.厳しく火を噴く／厳しく火が噴く。　（同上）

このように、森田(1994)は上のような「自他二様の形式が納まり得る文脈」（つまり、再帰構文）において自他両用動詞が現れやすいと指摘している。しかし、森田（1994)はこの指摘に留まり、自他両用動詞と構文との関係を述べていない。本稿は自他両用動詞を他動詞文のヲ格名詞（＝自動詞のガ格名詞）と現れる構文によって類型化し、どのような自他両用動詞がどのような構文において自動詞用法、或いは他動詞用法が現れるかを明らかにした。これにより、自他両用動詞の具体的な使用状況と自他動詞用法の現れる条件が明ら

かとなった。

５．比喩的用法

自他両用動詞の他動詞用法のうち、次のような比喩的に使われるものが少なくない。(63)～(66)の下線の部分はその文字通りの意味ではなく比喩的な意味で使われる。例えば、(63)の「幕を閉じた」は「終わった」という意味を表す。

(63)「第一次国共合作」は約三年半で幕を閉じた。

(64)平清盛＝本作品は清盛の出生をもって幕を開いた。

(65)(略)、この近代文明は千八百年代後半にアメリカで花を開き、(略)。

(66)十年におよぶロシア巡回教育は、しだいに実をむすんでいく。

これらの用法と【抽象名詞】を取る(D)類の動詞の用法（「歴史を開く」「話を運ぶ」など）との違いは、これらの用法は具体的動作を表す意味から拡張されたものであるということである。例えば、「花を開く」は(67)のような具体的な動作を表す意味がある。したがって、(65)のような比喩的な用法は、(67)のような具体的な意味を表す用法から拡張されたものであると考えられる。

(67)今年も、母のお部屋で水栽培しているアマリリスが花を開きました。

次の例が示すように上記の比喩的表現はすべて自動詞用法を持つ。

(68)今回も二十年前と同様に議長の退去で対決劇の幕が閉じるのか、または別の展開となるのか。対決の結末は見えない。

(69)いかにも波乱のシーズンらしく、大事件で幕が開いた。

(70)それが吉崎坊繁昌へとつながり、しだいに本願寺教団再興の花がひらいていった。

(71)狩猟民族は、苗を育てて実が結ぶのを待つような悠長な民族ではありません。

これらの比喩的表現が自他両用になりやすいのはその表現の意味

と関係している。つまり、それらの表現はヲ格名詞を取る他動詞文であるが、意味が自動詞に近いということである。(63)の「幕を閉じる」は「終わる」、(64)の「幕を開く」は「始まる」、(65)の「花を開く」は「始まる」、(66)の「実を結ぶ」は「成果が出る」の意味を表し、すべて自動詞（非対格動詞）の概念に近い表現である。そのため、自動詞用法が派生されやすいのである。

一方、(72)～(74)の比喩的用法「火を噴き出す」「舌を巻く」「胸を張る」は他動詞用法のみあり、その自動詞用法は見当たらない。(72)の「火を噴き出す」は比喩的に使われるが、コーパスでその自動詞用法「火が噴き出す」はすべて(75)のように具体的な動作を表す。また、(76)のように「怒りの火を噴き出す」は成立し「怒りの火が噴き出す」は成立しないことからも、比喩的な用法を持つのは他動詞のみであることが分かる。(73)の「舌を巻く」は「感心する」という比喩的意味を表す。コーパスでその自動詞用法は(77)のように具体的な動作を表す。「感心する」の意味を表す「舌を巻く」は自動詞用法を持たない（(78)参照）。(74)の「胸を張る」は「自信に満ちる」という比喩的意味を表す。コーパスでその自動詞用法は(79)のように生理現象という具体的な動作を表す。「自信に満ちる」の意味を表す「胸を張る」は自動詞用法を持たない（(80)参照）。

(72)角材の中を睨んでいるうちに、梅太郎に対する怒りが胸いっぱいに火を噴き出して来るのを覚えた。

(73)私たちは改めて、レガ人たちの生きた言葉を操る能力に舌を巻いた。

(74)私は無罪だ。息子にも胸を張って言える。

(75)銃口から火が噴き出す。

(76) a. 怒りの火を噴き出す（作例）

b. *怒りの火が噴き出す（作例）

(77)「なんだ？親をからから、じゃねえ、からからう、いけねえ舌が巻いちまった。

(78)*私たちは改めて彼らの能力に舌が巻いた。(作例)

(79) 女性は生理前などは胸が張るので硬くなったりします。

(80)*息子にも胸が張って言える。(作例)

「火を噴き出す」「舌を巻く」「胸を張る」が「怒る」「感心する」「自信に満ちる」の意味を表す場合、その主語は人間であると考えられる。上で見た「幕を閉じる」などの例と違って、非能格動詞の概念に近いものである。このように、自他両用動詞が比喩的な意味を表す場合、他動詞句の表す概念が非対格動詞に近い場合は自動詞用法が派生されやすく、他動詞句の表す概念が非能格動詞に近い場合は自動詞用法が派生されにくいことが明らかとなった。

６．おわりに

本稿は自他両用動詞をその他動詞文のヲ格名詞（＝自動詞文のガ格名詞）により類型化し、どのような自他両用動詞がどのような構文において自動詞用法、或いは他動詞用法が現れるかを考察した。本稿の考察から、自他両用という現象は構文や文脈によってもたらされたものであることが明らかとなった。これは自他両用という現象を構文や文脈のレベルから見ることによってはじめて明らかとなったことである。５節で見たように、比喩的用法の場合自動詞用法の派生が制限されるということが見られるが、なぜこのような現象が見られるのか今のところ解明できない。今後の課題としたい。

参考文献

井上和子、「他動性と使役構文」、『言語変容に関する体系的研究及びその日本語教育への応用』平成６年度科学研究補助金（一般研究_）研究結果報告書、1995、109-136。

王淑琴、「自他両用動詞『開く』『閉じる』について」、『政大日本研究』11 号（吉田妙子教授退休紀念論輯、特別寄稿）、台湾、政

治大学、2014、51-70。
奥津敬一郎、「自動化・他動化及び両極化転形」、『国語学』70 号、国語学会、1967、46-66。
影山太郎、『動詞意味論』、東京、くろしお出版、1996。
小柳昇、「有対自動詞の両用動詞化のメカニズム―『場主語構文』の観点からの分析」、『コーパスに基づく言語学教育研究報告』第 8 巻、東京、東京外国語大学、2012、129-152。
斎藤伸治、「視点と日本語の無生物主語」、『アルテス リベラレス』72 号、岩手、岩手大学人文社会科学部、2003、43-54。
佐藤琢三、『自動詞文と他動詞文の意味論』、東京、笠間書院、2000。
杉本武、「『ている』形の解釈と動作主性について」、『文藝言語研究・言語篇』第 42 号、茨城、筑波大学、2002、37-50。
須賀一好、「自動詞・他動詞」。『国文学解釈と鑑賞』51－1、東京、至文堂、1986、57-63。
須賀一好、「自他同形の動詞について」、『小松英雄博士退官記念日本語学論集』、東京、三省堂、1993、321-336。
須賀一好、「日本語動詞の自他対応における意味と形態との相関」、『日英語の自他の交替』、東京、ひつじ書房、2000、111-131。
高橋太郎、「現代日本語のヴォイスについて」、『日本語学』4 巻 4 号、東京、明治書院、1985、4-23。
高橋太郎、『動詞の研究』、東京、むぎ書房、1994。
角田太作、『世界の言語と日本語』、東京、くろしお出版、1991。
永澤済、「漢語動詞の自他体系の近代から現代への変化」、『日本語の研究』第 3 巻第 4 号、東京、日本語学会、2007、17-32。
西村義樹、「行為者と使役構文」『構文と事象構造』、東京、研究社、1998、107-203。
仁田義雄、「再帰動詞、再帰用法―Lexico-Syntax の姿勢から」、『日本語教育』47 号、東京、日本語教育学会、1982、79－90。
早津恵美子、「有対他動詞と無対他動詞の違いについて―意味的な特徴を中心に―」、『言語研究』95、東京、日本言語学会、1989、231-256。
森田良行、「自動詞と他動詞」、『国文学』第 6 巻、東京、明治書院、

1987、155-180。

森田良行、『動詞の意味論的文法研究』、東京、明治書院、1994。

森田良行、「自他両用動詞から自他同形動詞へ」、『早稲田日本語研究』第 8 巻、東京、早稲田大学国語学会、2000、74-63。

山田一美・山田勇人、「漢語サセル動詞に関する一考察」、『紀要』第 39 巻、大阪、大阪女学院大学短期大学、2009、19-29。

ヤコブセン，ウェスリー．M、「他動性とプロトタイプ論」、『動詞の自他』、東京、ひつじ書房、1995、166-178。

楊蒿郎、「自動詞・他動詞用法に意味的制限を持つ自他両用動詞について--二字漢語動詞を中心に」、『筑波日本語研究』第 12 巻、茨城、筑波大学、2007、65-88。

Hopper, P.J. and S.A. Thompson. “Transitivity in Grammar and Discourse,” *Language 56*. 1980. 251-99.

付記：本稿は『日語自他同形動詞的研究』(行政院国家科学委員会 NSC102-2410-H-004-057-MY2)の研究成果の一部である。また、査読の先生方から有益なコメントをいただき、記して心から御礼を申し上げたい。